

にいかした

北から南から

と

看護婦が 疲れ果てたら……

片岡 弘

マーケットで買い物をしていたら、「あら、先生では……」と声をかけられた。私の小学校の教員生活で最後の卒業生となったKさんとそのお母さんであった。高校を卒業した後埼玉県の看護学校に進学したと聞いてはいた。もともと色の白い快活な子であったが、薄く唇に紅をさして、何ともすてきな容姿の女性に成長していた。

この春からN市の病院に勤務しているのだという。「看護婦さんって毎日たいへんなんでしょ」と私が言ったが、「でも、あたしがんばっていますよ、先生」と言うKさんの瞳

は輝いていた。いつかテレビで見た看護学生の戴帽式のシーンが頭をよぎった。

四年ほど前、私は近くの県立病院で胆嚢摘出の手術を受けた。経過がよかったので二週間ほどで退院できたが、私にとっては生まれ初めての長期入院であった。そのときの病棟の看護婦さんたちの、親身になっての看護には今でも頭が下がる思いがする。とくに手術後麻酔が覚めてからの何時間かは（多分翌日まで）、随分と我が儘を言ったに違いないのだが、担当の看護婦さんは嫌な顔ひとつ見せずに介護してくれた。それにしても、三交代（昼間、準夜勤、深夜勤）で勤務する看護婦たちの、深夜勤も含めた不規則な勤務態様はたいへんに厳しい。実際に自分が患者になった体験を通して、改めてそう実感した。

実は以前に新潟市民病院労働組合婦人部の人たちの「女性医療労働者の勤務実態と子育て調査」を、研究所としてお手伝いしたことがある。調査項目の一つに健康状態を尋ねた問いがあったが、看護婦の場合「翌日に疲れ

が残り回復しない」という回答が七〇パーセントを超えていた。これは、他の職種も含めた女性従事者全体の平均五八パーセントを、一二ポイントも上回る数値であった。日本医療労働組合連合会の最近の調査によれば、看護婦の三分の一が月九回の夜勤をしており、妊娠しても人手不足で約半数は深夜勤を免除されず、出産までに順調な経過をたどる人はわずかに二割にすぎないという。

人の命を預かる医療現場での深夜・交代勤務が必要なことはいうまでもない。問題は従事者に対する十分な権利保障と健康管理であり、そのための条件整備こそが求められている。にもかかわらず、国立西新潟中央病院では、今よりもさらに苛酷な二交代制・十六時間勤務を一部病棟に導入するという。「(「しんぶん赤旗」五・二七)。「規制緩和」の名目で労働基準法の「女子保護」規定を徹底するという法案審議と軌を一にしている。

すでに二交代制勤務が導入された国立病院では、三人に一人の看護婦が「(患者に)優

しくできなかった」といい、「細かな配慮に欠け小さなミスが多くなる」などの声も出始めていると聞く。看護婦が疲れ果てたら日本の医療はどうなるだろうか、心配である。

(かたおかひろし Ⅱ 県民教育研究所)

